

『東国正韻』漢字音の重韻字表記の特徴

林茶英

limdy78@gmail.com

キーワード：韓国漢字音 『東国正韻』 中声 韻母 重韻 等 開合

要旨

本稿の目的は『東国正韻』漢字音における重韻字の中声表記に関する修正基準を解明し、『東国正韻』漢字音の中声表記が現実漢字音のそれをほぼそのまま受け入れているという事実を明証することにある。

全体で7ペアの重韻のうち、通撰1等韻、咸撰1、2等韻、山撰2等韻の場合、『東国正韻』漢字音と現実漢字音の中声表記の間に差がほとんど見られなかった。それに対して蟹撰1,2等韻や梗撰2等韻の『東国正韻』漢字音の場合、一見現実漢字音を修正しているように見える。しかし、2種類の漢字音を比較した結果、開口の場合、『東国正韻』漢字音が現実漢字音の傾向を大部分反映しており、現実漢字音に主な傾向が見られない場合に限ってそれらの字を等によって分韻したということが明らかになった。

それに対して、合口及び唇音声母字の場合、『東国正韻』では現実漢字音を受け入れず、最初から等によって分韻していると思われる。それは『東国正韻』の編者らが円唇の資質を持っている字に限って開口とは異なる修正基準を建てていたということを示している。

1. はじめに

1.1 研究目的

『東国正韻』(1447)は『訓民正音』(1446)の頒布直後編纂された標準的な韓国漢字音の韻書である。‘訓民正音’創制以降15世紀末までに刊行されたほとんどすべての文献の漢字音表記には『東国正韻』漢字音が用いられたが、『六祖法寶壇經諺解』(1496)や『施食勸供』(15世紀末)などの文献では漢字音表記に現実漢字音が利用されており、16世紀以降のほとんどの文献では現実漢字音だけが用いられている。漢字音表記に『東国正韻』漢字音が利用されなくなった理由は、それが実際に通じて使われていた現実漢字音と乖離した理想の漢字音であったためである。しかし、当時には実用的ではなかったこの漢字音を利用すれば‘訓民正音’を創制し、『東国正韻』及び『洪武正韻訓詁』(1455)を編修した朝鮮初期の学者らの音韻理論に対する理解がさらに一層深くなると思われる。

『東国正韻』漢字音を正しく理解するためにはまずその漢字音の修正基準を明らかにしておくかなければならない。『東国正韻』「序」には現実漢字音のどこを如何に修正したのかについて

説明しているが、説明の範囲が初声や終声に限られており、中声に関しては一言も触れていない。したがって『東国正韻』の修正基準の全般を理解するためには現実漢字音との体系的な比較が必要と思われるが、その際、中国語音韻の変化や変遷のため生じた例外を『東国正韻』の編者らが如何に処理しているのかについても検討しなければならない。趙雲星(2011)は『東国正韻』漢字音を現実漢字音及び『古今韻会举要』の反切と比較した研究であるが、『東国正韻』の韻母体系は基本的に当時の現実漢字音をもとにしているものの、開合、韻尾、特殊な例外字に限って修正したものであると述べた。林茶英(2010)は『東国正韻』の91韻目のなかで「賁」「傀」「佳」「媯」「雞」韻に属する3999字の『東国正韻』漢字音と現実漢字音の中声を比較し、『東国正韻』の修正基準について検討した研究であるが、現実漢字音の主要母音や開合が異なっている場合、韻尾が写されていない場合には必ず修正されたと説明した。また、2種類の韓国漢字音を比較するほか、「重韻」¹や「重紐」のような中国語音における例外的現象についても触れておいたが、研究の範囲が上述した五つの韻目に限られたため「重韻」に関して、早まった結論を出してしまった。そこで本研究においては重韻に当たるすべての韻まで研究範囲を広げて、『東国正韻』の重韻字表記の特徴を明らかにし、それに基づいて『東国正韻』漢字音の中声がどの範囲まで現実漢字音の中声を受容しているのかについて検討したいと思う。

1.2 研究方法

本研究においては『東国正韻』91韻目の「賁」「佳」「傀」「拑」「京」「公」「干」「甘」韻目、つまり広韻206韻の「哈(灰)泰」「皆佳夬」「庚耕」「東冬」「刪山」「覃談」「咸銜」韻を研究対象にした。対象字の『東国正韻』漢字音、現実漢字音、『洪武正韻訓詁』漢字音及び、反切を調べ、すべての資料が揃った字を中心として以下の通りに検討した。

まず、中国漢字音の韻母と韓国現実漢字音の中声を比べて、現実漢字音が重韻の相違を如何に受け入れたのかを調べる。この際、重韻の合流のような中国語自体の音変化をも考慮した。

次に、『東国正韻』漢字音と現実漢字音の中声を比較して、修正されているところがあれば、修正の理由を説明する。7ペアの重韻すべてを考察した結果を纏め、それに基づいて『東国正韻』漢字音の重韻字表記の特徴を検討し、修正基準を推定する。

2. 終声「∅」の韻類

ここでは広韻206韻の「哈(灰)泰」韻や「皆佳夬」韻に当たる「賁([ɰi²])」「佳([ai] [wai])」「傀([oi])」韻について検討して行きたい。これらの韻は16撰中で蟹撰に属し、韻尾「-i」を持っている。「哈(灰)泰」韻が1等韻であり、「皆佳夬」韻が2等韻である。『東国正韻』においては、1等韻が「賁」「佳」「傀」韻に配列されており、2等韻はすべて「佳」韻に置かれてい

¹ 同撰で開合や等を同じくする韻が2つ以上ある場合を言うが、これらは1等や2等韻にしか見られない。これまでの研究によれば、重韻が実際に存在した現象という主張が支持を得ており、重韻の差が音の地域あるいは時代の差を反映しているという見解より主要母音の差を現しているという見解が優勢になっている。本稿においても重韻が主要母音の違いを反映していることを前提とする。

² 韓国語母音の推定音は李基文(1998)による。

る。以下では蟹摂 1、2 等韻を開合によって分け、まず開口韻に当たる「賁」韻や「佳」韻開口を検討し、次に合口韻に当たる「佳」韻合口と「傀」韻を検討する。

2.1 開口「賁」「佳」韻

これまでの研究によれば、重韻は切韻(601)時期には存在したが、8~9世紀にはその区別がなくなったという³。しかし、すべての重韻が同時に合流したのではなく、韻別に合流時期にずれがある。なお、同じく蟹摂でも、開合によって合流時期が異なっているが、開口の場合、合口に比べて比較的早い時期に合流したと思われる。文献資料によれば、玄扈の『一切経音義』(649)(以下玄扈音と略称)では1等の哈韻や泰韻、2等の皆韻、佳韻、夬韻がすべて区別されているが、何超の『晋書音義』(747)(以下何超音と略称)では哈韻と泰韻の区別がなくなり、2等の皆韻去声と夬韻が合流したという。そして慧琳の『一切経音義』(807)(以下慧琳音と略称)では1等韻や2等韻の重韻の区別が完全になくなった事実が確認できる⁴。つまり、1等重韻が2等重韻より早い時期に合流したと言えるのである。15世紀の中国語音を転写した『洪武正韻訳訓』漢字音を見ると、当然であるが、重韻の差が全く見られず、むしろ中古後期の音変化である2等韻牙喉音字の口蓋化が部分的に現れている。

『東国正韻』漢字音や現実漢字音はともに重韻の違いを表記に反映している。しかし、2つの漢字音が完全に一致しているわけではない。ここにおいてはまず現実漢字音の中声表記を検討する。蟹摂 1、2 等韻の現実漢字音を見ると声母によって偏りが存在するが、だいたい1等の哈韻が「ㄷ」([ɬ])に、泰韻が「ㄹ」([ɭ])に現れ、2等の皆韻が「ㄷ」に、佳韻と夬韻が「ㄹ」に現れる傾向がある⁵。蟹摂 1、2 等韻開口の現実漢字音⁶の中声と中古音推定音価⁷の対応を見ると以下のようなものである。

<表 1> 蟹摂 1、2 等開口の中古音と現実漢字音

等	韻母	中古音推定音	現実漢字音
1等	哈：泰	ɬi : ɭi	ㄷ(ㄹ ⁸) : ㄹ
2等	皆：佳、夬	ɐi : ai, ai ⁹	ㄷ : ㄹ、ㄹ

<表 1>により、蟹摂 1、2 等開口の現実漢字音中声の分布が等によって分けられているのでは

³ これまでの研究によれば、重韻が実際に存在した現象という意見が説得力を得ており、重韻の差が音の地域あるいは時代の差を反映しているという見解より主要母音の差を現しているという見解が優勢になっている。本稿においても重韻が主要母音の違いを反映していると前提している。

⁴ 馬徳強(2008: 70~71)参照

⁵ 現実漢字音のこういう傾向について河野六郎(1979: 455-456)は旧層([ɬ])に新層([ɭ])が覆う事態ではないかと述べた。しかし、伊藤智ゆき(2007: 132)は現実漢字音における哈韻と泰韻開口の分布の偏りは重韻の違いを反映しているとするのが妥当であると説明した。

⁶ 現実漢字音は伊藤智ゆき(2007)による。

⁷ 推定音価は平山久雄(1967)による。

⁸ 牙音と泥母の中声はほとんど「ㄹ」に現れるが、それ以外はほとんどすべての哈韻開口の中声は「ㄷ」に現れる。

⁹ 平山久雄(1967)によれば、佳韻と夬韻の違いが韻尾にあるという。この説には議論の余地があると思われるが、本研究のテーマは韓国漢字音であるため、推定音については議論しない。

なく、韻母によって分布の偏りが存在することがわかる。

1等韻である哈韻と泰韻はすべて主要母音と韻尾から構成されており、その推定音は[ɿ]と[ai]である。韓国語中声と中国語韻母の対応から考えてみると、両韻共通の韻尾である[i]が中声「ㄷ」に対応し、主要母音である、[ʌ]と[a]がそれぞれ「ㄷ」と「ㅌ」に対応していると言えるだろう。ただ、すべての現実漢字音の中声が「ㄷ」あるいは「ㅌ」になっているのではなく、例外的に‘哉’‘才’([ca])のように韻尾が写されていない場合もあれば‘猜’‘颯’([sɿi])のように主要母音が異なっている場合もあり、また‘頼’‘瀨’([roi])のように開合が異なっている場合も見える。『東国正韻』においてはこのような例外をすべて修正している¹⁰。

2等韻である皆韻、佳韻、夬韻も同じく主要母音と韻尾からなる韻である。その推定音はそれぞれ[eɪ]、[aɪ]、[ai]であるが、これら韻の現実漢字音を見ると、皆韻が「ㄷ」に、佳韻と夬韻が「ㅌ」に現れる傾向が強い。韻尾である[i]や[ɪ]が中声「ㄷ」に対応し、主要母音である[e]や[a]がそれぞれ「ㄷ」と「ㅌ」に対応したと考えられる。2等韻の現実漢字音にも少なくない例外が見えるが、1等韻の例外パターンのみならず、‘階’‘戒’‘界’([kɿai])などのような例外も見られる¹¹。

以上で述べたように「ㄷ」と「ㅌ」の区別は1等と2等の差を現しているのではなく、重韻の主要母音の差異を反映したと考えられる。中古音の推定音によれば、蟹摂1、2等の主要母音には[ʌ][a][e][a]の4つの母音があるが¹²、これらはすべて低母音に当たる。中国語の母音体系に比べ単純であった韓国語の母音体系は複雑で多様な蟹摂1、2等の主要母音を開口度の違いによって2つの母音すなわち[ʌ](ㄷ)と[a](ㅌ)に分けて受け入れた。つまり、以上の4つの母音は舌の前後によれば[e][a]対[ʌ][a]に分けられ、舌の高さ、すなわち開口度によれば[ʌ][e]対[a][a]に分けられる。ところで、蟹摂1、2等の現実漢字音の中声を見ると、哈韻と皆韻の中声が「ㄷ」に、泰韻、佳韻、夬韻の中声が「ㅌ」に現れる。したがって「ㄷ」をもって開口度が比較的に小さい母音を「ㅌ」をもって開口度が比較的大きい母音を表記しようとしたということが明らかになる。そういう事実から考えれば、漢字音を受け入れる際、韓国語の母音体系においては舌の前後より開口度の方が弁別性が強かったと言えるかもしれない¹³。

一方『東国正韻』では蟹摂1、2等開口が皆韻及び佳韻開口に載せられている。皆韻の中声は「ㄷ」であり、佳韻の中声は「ㅌ」である。一見重韻の違いを表しているように見えるが、若干のずれがある。皆韻や佳韻開口に属している字の中古音反切を調べた結果、皆韻には哈韻のうち喉音字、泥母を除いた舌音字、齒頭音字、来母字、そして灰韻の唇音字が載っており、佳

¹⁰ 林茶英(2010: 72)参照

¹¹ [ɿai]で現れる現実漢字音の例について河野六郎はこれらをd層に属すと推定したが、伊藤智ゆきは[*ɿai](もしくは[ɿai])が韓国語内で[ɿai]に変化した可能性もあると述べた。伊藤智ゆき(2007: 139)

¹² 佳韻と夬韻の主要母音を区別する場合、蟹摂1、2等の主要母音は5つになる。

¹³ このような結果は『訓民正音』「中声解」の「ㅌ」に関する記述から見ても当然のことである。「中声解」では「ㅌ」について“ㅌ与・同而口張”と説明している。この説明により「ㅌ」の方が「ㄷ」より開口度が大きくて平唇の低母音ということが明らかになる。

“口張及び口蹙が何を意味するのかわかぬ。開合の差という説(姜信沆1964: 93-94)と開口度を現れるという説(李崇寧1949: 23)があるが、唇の形と開口度を包括した概念と考えられるかもしれない。”李基文(1990: 103)参照

韻には哈韻の牙音字や泥母字、泰韻、そしてすべての2等韻開口、合口の唇音字が載っているということがわかった。つまり、賞韻と佳韻の違いは1、2等の違いでも重韻の違いでもないのである。蟹撰1、2等の現実漢字音と『東国正韻』漢字音の中声表記を比べてみると、<表2>のようになる。

<表2> 各韻母の声母別現実漢字音と『東国正韻』漢字音の中声表記比較

韻母 ¹⁴	声母	現実漢字音中声	『東国正韻』漢字音の中声
哈	舌音 (泥母除外)	「・」胎台擡臺苔食待怠殆戴貸袋黛態代玳(16)	・
哈	齒頭音	「・」災栽菑材裁財宰載(上声)彩綵採在再載(去声) 菜塞(16) 「・」纒(1) 「ㄣ」猜顛(2) 「・」 「・」哉才(2) 「・」 「ㄣ」賽(1)	・
哈	喉音	「・」哀孩頰海醜愛(6) 「・」 「ㄣ」埃(1)	・
哈	來母	「・」來萊(2) 「ㄣ」賚(1)	・
哈	牙音	「ㄣ」漑槩概愷愷礙(7) 「・」荄開改咳(4)	ㄣ
哈	泥母	「ㄣ」乃竄(2)	ㄣ
灰	唇音	「・」杯坏醅培裴裴玫梅媒每(平声)莓莓每(上声)背(上声)輩配焙倍(去声)妹昧(20) 「ㄣ」倍(上声)背(去声)佩悖(4) 「ㄣ」瑁(1)	・
泰	牙喉音	「ㄣ」蓋巧艾害(4)	ㄣ
泰	齒頭音	「ㄣ」蔡(1)	ㄣ
泰	舌音	「ㄣ」泰太汰大鈇奈奈(7) 「・」帶(1)	ㄣ
泰	唇音	「ㄣ」貝沛(2) ¹⁵	ㄣ
泰	來母	「ㄣ」賴瀨(2) 「ㄣ」 「ㄣ」 「ㄣ」賴(1)	ㄣ
皆	牙音	「・」皆楷痲措措(5) 「ㄣ」楷介介芥疥(5) 「ㄣ」戒誠界轄階(5) 「・」 「ㄣ」楷(1)	ㄣ
皆	唇音	「・」拜排埋霾(4) ¹⁶	ㄣ
皆	正齒音	「・」齋(1) 「ㄣ」豺(1) 「ㄣ」儕(1) 「ㄣ」 「ㄣ」殺(1)	ㄣ
皆	喉音	「・」駮骸(2) 「ㄣ」噫挨(2) 「ㄣ」薤(1)	ㄣ
佳	牙音	「ㄣ」街崖涯暄(4) 「・」懈懈(2) 「ㄣ」佳(1)	ㄣ

¹⁴ 本研究において「韻母」や「声母」のような用語が単独で使われる場合、中古音の韻母や声母を指す。

¹⁵ 権仁瀚(2009)によると、泰韻明母の「昧昧」の現実漢字音の中声が「・」に現れる。

¹⁶ 伊藤智ゆき(2007)の資料表によると皆韻並母の「韃」の中声が「ㄣ」であるが、『東国正韻』に載っていない。

佳	泥母	「ㄏ」 嫻(1)	ㄏ
佳	唇音	「ㄏ」 牌簿派稗賣(5) 「ㄊ」 買(1)	ㄏ
佳	正齒音	「ㄏ」 債趾(2) 「ㄏ」 「ㄏ」 灑洒(2) 「ㄏ」 「ㄊ」 釵(1) 「ㄊ」 差(1) 「ㄊ」 柴(1)	ㄏ
佳	喉音	「ㄊ」 隘蟹(2) 「ㄏ」 矮(1) 「ㄊ」 「ㄊ」 鞋(1) 「ㄊ」 「ㄊ」 解(1)	ㄏ
夬	舌音、喉音	「ㄏ」 餽蝨(2)	ㄏ
夬	唇音	「ㄏ」 唄邁(2) 「ㄏ」 「ㄊ」 「ㄊ」 敗(1)	ㄏ

<表2>により、次の2つが明らかになったと思われる。第1に、皆韻唇音字を除けば、『東国正韻』漢字音はほぼ現実漢字音の表記をそのまま受け入れた。第2に『東国正韻』の編者らは蟹撰1、2等字を分韻するとき重韻の差を顧慮せず、現実漢字音の傾向に当てはめて賞韻か、佳韻のどちらかに入れた。しかし、どちらか一方の傾向が見られない場合には等の差異を顧慮して分韻したと考えられる。

まず『東国正韻』漢字音が現実漢字音をそのまま受け入れた理由は、『訓民正音』「鄭麟趾序」や『東国正韻』の「序」に現れる言語観¹⁷と一脈相通ずることで、それは邵雍の『皇極經世書』に現れる性理学的言語観に影響された結果と思われる¹⁸。ほとんどの現実漢字音の中声には等の差異がはっきり現れず、たんなる洪音(1等や2等)と細音(3等と4等)の違いだけが現れる傾向が見られる。等と開合が同じである韻が複数存在する現象は中国音においても非常に例外的現象であり『東国正韻』を編纂するときにはそのような現象がもはやなくなっていたため、韻書の編者にとって重韻のなごりを残している現実漢字音は修正の対象にしかならなかったかもしれない。もし『東国正韻』の編者らが体系を最も重視したとすれば蟹撰1、2等韻の中声を等の差によって区別するか、あるいは「ㄊ」か「ㄏ」の一方に統一したかもしれない。しかし、現実漢字音をそのまま受け入れるのが基本方針であったため、結果的に蟹撰の1、2等韻が賞韻や佳韻に分かれて入ってしまったと見られる。つまり『東国正韻』を編纂するとき漢字音体系全体に影響が生じてしまう場合を除けば、基本的に現実漢字音を優先したということが確認できる。

ここで例外の修正について簡単に触れておく。林茶英(2010: 72)は韻尾が写されていない中声表記、主要母音が完全に異なっている中声表記、開合が間違っている(唇音除外)中声表記は『東国正韻』全般にわたって修正対象になったと述べた。例えば、吟韻開口齒頭音字のうち中声が「ㄊ」に現れる「纒哉才」などの例は韻尾が写されていない表記であり、中声が「ㄊ」に

¹⁷ 『東国正韻』「序」では“矧吾東方表裏山河自為一區風氣已殊於中国呼吸豈与華音相合歟然則語音之所以与中国異者理之然也”“字母之作諧於声耳如舌頭舌上唇重唇輕齒頭正齒之類於我国字音未可分弁亦当因其自然何必泥於三十六字乎”と説明した。この説明に基づけば『東国正韻』の編者らが漢字音について必ずしも中国音にしたがわなければならないと思ったのではないということが明らかになる。したがって中声を修正するときにもそういう考え方に影響されたと考えられる。

¹⁸ 沈小喜(2013) 参照

現れる「猜韻」のような例は主要母音が異なっている例に当たる。また「頼瀬」などのように泰韻開口にもかかわらず中声が「ㄷ」に現れる場合は開合が間違っている例に当たる。〈表2〉で確認できるように『東国正韻』ではそういった例外をすべて修正した。問題になるのは皆韻唇音字である。現実漢字音の中声がすべて「ㄷ」であるにもかかわらず『東国正韻』の編者らはなぜかそれらの字の中声をすべて「ㄱ」に修正した。その理由はおそらく声母と関係があると思われる。『東国正韻』では唇音字の場合、現実漢字音の中声に合口介音が写されていないくても修正しなかったが、それは唇音が円唇性を持っているためである。こういう事実から見ると『東国正韻』の編者らは唇音字について特別な修正基準を立てていると見られ、それは結局合口韻に対する修正とも結び付けられると考えられる。それについては以下で説明する。

次に、皆韻の中声をすべて「ㄱ」に修正した事実から見れば『東国正韻』の分韻の基準はおそらく四等呼にあったと考えられる。皆韻の現実漢字音のようにどちらか一方が圧倒的に多くなく、いろいろな中声が混ざっている場合、どちらを標準音と決めるかという問題は編者らにとってたいへんややこしい問題であったと思われる。そういう場合、編者らには分韻の基準が必要だっただろうと見られるが、基準を定めるとき参考になれるものはやはり中国伝統音韻学しかなかっただろう。周知の如く『訓民正音』と『東国正韻』の編修に参加した人物はほぼ同一人物である。したがって訓民正音を作ったときに参考した韻書や韻図を『東国正韻』の編者らも参考したと言えるだろう。俞昌均(1966: 121)によると、参考韻書には『切韻』¹⁹『古今韻会』『洪武正韻』『中原雅音』『蒙古韻略』『礼部韻略』があり、韻図には『四声韻譜』『切韻指掌図』『声音唱和図』『七音略』があるが、上述したように蟹摂1、2等重韻は慧琳音時期にすでに合流してしまっただけ『東国正韻』の編者らにとって重韻の差より等の方の方が顧慮すべき問題だったのであろう。その結果、2等韻である皆韻を他の2等韻と一緒に佳韻に入れた可能性が高いと思われる。

ここで触れておきたいのは、はたして『東国正韻』の編者らが理解していた四等に関する概念と今の我々が理解している概念が全く一致するかどうかという点である。『訓民正音』「中声解」では「ㄷ」([a])と「ㄷ」([ʌ])に関して“ㄷ与ㄷ、同而口張”と述べている。この説明に基づけば「ㄷ」は「ㄷ」より開口度が大きい低母音と推定することができる。一方、1等と2等の違いを見ると、未だ等の概念に関してすべての学者らの意見が統一されていないが、開口度が最も大きい韻が1等韻であり、2等韻は1等韻より開口度が小さいという説明が定説になっている。それは等に関する最初の説明である『音学弁微・弁等例』²⁰の「音韻有四等、一等洪大、二等次大、三四皆細、而四尤細」といった説明とも通じているため、分等の基準を韻母で求めることは妥当であると受け入れられている。したがって、音韻理論を土台として生じた『東国正韻』漢字音について言えば、開口度の側面からは「ㄷ」をもって開口度が大きい1等韻の主要母音を、中声「ㄷ」をもって2等韻の主要母音を中声「ㄷ」で写した方が適当であったか

¹⁹ ここにおいて言う『切韻』は陸法言の著書ではなく『広韻』や『集韻』等の切韻系の韻書を指していると思われる。

²⁰ 清代の学者である 江永(1681-1762)の著書

もしれない。もちろん現実漢字音をそのまま受容するという基本原則があったのが『東国正韻』で蟹摂1、2等の中声を修正しなかった最も大きい理由であるが、一方『東国正韻』の編者らが四等の差異を主要母音の開口度の差異とは考えなかった可能性もある。『訓民正音』や『東国正韻』は15世紀初に作られたものであるため『東国正韻』の編者らには江永の説に接する機会がなかったはずである。それでは訓民正音を創制するとき参考にした韻図には等に関してどのように説明しているのだろうか。沈小喜(1995: 92-93)は唐宋時期までさかのぼれば、四等を声母との結合関係をもって説明していることが確認できると述べ、その根拠として『守温韻学残卷』『切韻指掌図』『經史切韻指南』『四声等子』の四等に関する説明を挙げた。さらにその韻図の説明に基づいて四等と三十六字母の結合関係を表にした²¹。つまり『東国正韻』の編者らが等を韻母と声母の結合関係と把握していた可能性があると思われる。

つまり蟹摂1、2等韻の『東国正韻』漢字音の修正基準は次のように考えられる。まず『東国正韻』の編者らは漢字音体系全体を乱さない限り、現実漢字音を優先し、それをそのまま受け入れようとした。そのため哈韻が賞韻に、泰韻佳韻夬韻が佳韻に置かれた。次に現実漢字音にどちらか一方の傾向が見られない場合、その韻は韻図の等にしたがって分韻した。その結果皆韻が佳韻に置かれた。

2.2 合口「佳」「傀」韻

文献資料によると、蟹摂1等合口の重韻は玄応音や何超音の時期までは区別されていたが、慧琳音では合流したという。2等韻の場合声調によって合流時期が異なっている。皆韻の去声と夬韻の場合玄応音や何超音の時期にすでに合流しているが、佳韻とはその差を保っていた。それに対して平声及び上声の場合何超音の時期までには重韻の区別があったが、慧琳音の時期には合流したという²²。これら韻の『洪武正韻訳訓』の漢字音を見ると、1等の灰韻(哈韻の合口)及び泰韻の中声が共に「ㄱ」([ui])に現れるのに対して、2等の場合皆韻の中声は「ㄱ」あるいは「ㄱ」に、佳韻の中声は「ㄱ」([wai])あるいは「ㄱ」([wa])に、夬韻の中声は「ㄱ」「ㄱ」「ㄱ」現れる。これは何超音の時期に夬韻が皆韻と合流し、慧琳音の時期になって佳韻とも合流した事実を反映しているように見られて興味深い。

ところで、これらの韻の現実漢字音を見ると思いのほか重韻の違いが現れずさまざまな中声で写されているということがわかる。蟹摂1、2等合口の中古音韻母推定音、現実漢字音の中声、

²¹ 四等と広韻三十六字母の結合。沈小喜(1995: 93)より引用。

	来	匣	曉	影	心	從	清	精	疑		溪	見	泥	定	透	端	明	並	滂	幫	一等						
	来	匣	曉	影	禪	審	床	穿	照	疑		溪	見	娘	澄	徹	知	明	並	滂	幫	二等					
日	来	喻		曉	影	禪	審	床	穿	照	疑	群	溪	見	娘	澄	徹	知	明	徹	並	奉	滂	敷	幫	非	三等
	来	喻	匣	曉	影	邪	心	從	清	精	疑		溪	見	泥	定	透	端	明	並	滂	幫				四等	

²² 馬徳強(2008: 70~71)参照。

『洪武正韻訳訓』漢字音の中声を比較してみると次の<表3>のようになる。

<表3> 蟹摂1、2等合口の韻母と中声

等	韻母	中古音推定音	『洪武正韻訳訓』	現実漢字音
1等	灰：泰	uai : uai	꺾 : 꺾	꺾 : 꺾
2等	皆：佳：夬	uei : uai : uai	꺾꺾 : 꺾꺾 : 꺾꺾꺾	꺾꺾 : 꺾꺾 : 꺾꺾

‘訓民正音’の中声体系から考えれば、中声「꺾」の合口は「꺾」([oi])であり「꺾」の合口は「꺾」([wai])である。したがって灰韻と皆韻合口の現実漢字音中声は「꺾」に泰韻佳韻夬韻合口の中声は「꺾」に現れるだろうと推測できるが、<表3>で確認できるように実際にはそうではない。以下では蟹摂1、2等合口の現実漢字音が混乱している理由について触れておく。

蟹摂1、2等合口の韻母の構成を見ると、主要母音の前に後舌高母音の合口介音が付いている。低母音の主要母音を持っている蟹摂1、2等の場合、合口介音によって韻母全体の音が影響された可能性があると思われる。推定音を見ると、灰韻泰韻皆韻の主要母音が佳韻と夬韻の主要母音より後舌母音に当たるということがわかる。したがって介音[u-]と発音の位置が比較的に近い灰韻泰韻皆韻は主要母音と合口介音が混じりあって1つの母音[o]のように聞こえてそれら韻母の中声が「꺾」に写されたと思われる。反面佳韻夬韻の合口介音と主要母音は灰韻泰韻皆韻に比べれば発音部位の距離がある程度あったため、2つの要素の発音がはっきり聞こえたため、合口介音と主要母音がそれぞれ[u]と[a]に対応して現実漢字音の中声が「꺾」に現れたと見られる。つまり、開口の場合開口度の大きさによって中声に分かれたのに反して、合口の場合は合口介音と主要母音の近さに影響されたと考えられる。

蟹摂1、2等合口の『東国正韻』漢字音を見ると、開口の場合とは違って等によって整然と傀韻や佳韻合口に置かれていることがわかる。すなわち灰韻、泰韻合口は傀韻に、皆韻、佳韻、夬韻の合口はすべて佳韻合口に置かれているのである。まず1等韻を見ると、灰韻や泰韻合口の現実漢字音中声のほとんどは「꺾」に現れ、例外が少ない²³。『東国正韻』においては一部の例外のみすべて修正した。それは「꺾」([o])が「꺾」([a])の合口に当たるため、体系の側面から考えても修正する必要がなかったためであろう。しかし、2等韻はそう単純ではない。2等韻の現実漢字音と『東国正韻』漢字音の中声は以下の<表4>のようである。

<表4> 皆韻佳韻夬韻の現実漢字音と『東国正韻』漢字音の中声比較

韻母	現実漢字音の中声	『東国正韻』漢字音の中声
皆韻	꺾 (7) 꺾꺾 ([wəi]) (2) ²⁴	꺾꺾 (7) 꺾 (3) ²⁵

²³ 泰韻合口の場合、すべて7字があるが、その中声が例外なく「꺾」に現れる。灰韻の場合、45字のうち36字の中声が「꺾」に現れ、例外には槐(꺾)、磴(꺾([ii]), 꺾)、内隊對(꺾)、焯(꺾([iu]), 꺾)、碓(꺾)、꺾([i]), 꺾(꺾)、未(꺾、꺾)がある。

²⁴ 現実漢字音が確認できる皆韻合口はすべて7字であるが、そのうち中声が「꺾」に現れる字には「乖怪壞(見母)淮懷」があり、贖と壞(匣母)の中声は「꺾」と「꺾꺾」に現れる。

²⁵ 皆韻合口のなかで「壞(見母)壞(匣母)贖」の3字は『東国正韻』において佳韻だけでなく傀韻にも載っている。

佳韻	斗(1) ²⁶	ㄐ
夬韻	ㄐ(1)斗(1) ²⁷	ㄐ

<表 4>を見ると『東国正韻』ではすべての蟹摂 2 等合口を「ㄐ」で表記したということがわかる。2 等韻のうちまず佳韻夬韻の合口を検討して見よう。これら韻の現実漢字音中声は「ㄐ」あるいは「斗」に現れる。『東国正韻』で佳韻夬韻合口の中声を「ㄐ」に表記したのは、現実漢字音の中声がほとんど「ㄐ」に現れるためであるという理由もあるが、「ㄐ」がその 2 つの韻の開口を表す「ㄏ」の合口を表すためでもある。しかし、中声「斗」には韻尾が写されていないためすべて「ㄐ」に修正した。

一方皆韻合口の現実漢字音中声は「斗」に現れる傾向が強い。しかし、『東国正韻』ではそれをすべて「ㄐ」に修正した。泰韻開口の場合、それが 1 等韻であるにもかかわらず現実漢字音を修正せず 2 等韻と同様に「ㄏ」で表記したのである。では、なぜ皆韻合口を夬韻に入れず、すべて修正して佳韻に入れたのであろうか。現在考えられる理由には次の 2 つがある。

まず考えられる理由は『東国正韻』の編者らが皆韻合口の現実漢字音を「ㄐ」に認識していた可能性があるかもしれないということである。『東国正韻』の佳韻合口に載っている皆韻合口は合計 23 字²⁸あるが、このなかで今現実漢字音の資料が残っている字は 7 字である。つまり残りの 16 字の 15 世紀当時の現実漢字音は現在確認できないのである。しかし当時の編者らはこれらの発音を知っていたはずであろう。つまり皆韻合口のうち現時点で確認できない現実漢字音が「ㄐ」あるいは「斗」であったとすれば、すべての皆韻合口が『東国正韻』の佳韻合口に置かれたとしても問題にならないだろう。ところで『東国正韻』漢字音を見ると、皆韻合口のなかで 7 字、つまり「壞(見母)蒯蕘瓛塊槐壞(匣母)」字に‘又夬韻²⁹’というしるしが付いている。またその 7 字のなかで現実漢字音が確認できるのは「壞(ㄐ([koi]))瓛(ㄐ, ㄐ([hwai]))壞(ㄐ([hoi]))」の 3 字がある。‘又韻’とは 1 字が複数の音を持っていることを意味し、複数の反切を持っている場合が多い。例えば槐字の場合、皆韻に属している同時に灰韻にも属している³⁰。つまり 15 世紀には皆韻合口字の母音が、2 種類すなわち [oi] と [wai] が並存した可能性が全くないとは言い切れない。そういうふうにならぬ発音が同時に存在したとすれば、『東国正韻』漢字音が現実漢字音を全く受容しなかったとはいにくいだろう。しかし、そういう場合、今確認できる皆韻の現実漢字音のうち中声が「ㄐ」に現れる例が 1 つも残っていないということが疑問に残る。

次に、『東国正韻』の編者らが開口と合口の分韻や修正の基準をそれぞれ異にしていた可能

²⁶ 伊藤智ゆき(2007)の資料表では佳韻の「拐拐」の中声が「ㄐ」に、「画」の中声は「斗」に「歪」の中声が「ㄐㄐ」に現れるが、「画」を除いた 3 文字は『東国正韻』に載っていない。権仁瀚(2009)によると「掛掛挂」の中声が「ㄐ」に現れる。

²⁷ 「快」の中声は「ㄐ」に「話」の中声は「斗」に現れる。

²⁸ 反切が確認できた字が 23 字ある。「乖怪恠壞(見母)闕蒯萑蕘瓛噴瓛聾聾嚙懷懷櫻槐裏襖襖淮壞(匣母)」

²⁹ 夬韻及び夬韻の上声である 夬韻や去声である 倫韻。

³⁰ 皆韻の反切は戸乖(『広韻』)であり灰韻の反切は戸恢(『集韻』)である。

性があると見られる。つまり、開口の場合現実漢字音の傾向にしたがって分韻するという原則を立てていたが、合口の場合まず中国音の韻や等に合わせて分韻した可能性があると思われる。したがって‘合口介音が表記に写されていない場合、必ずそれを修正した’という修正基準は‘合口の場合中国伝統の音韻学の等や韻にしたがって修正した’のように直さなければならない。また、その修正基準は合口韻のみならず、唇音字についても同様に適用されたと思われる。皆韻開口の唇音字の現実漢字音を見ると、すべての中声が「・」であるが、『東国正韻』ではそれらの中声を「ㄱ」に修正した。詳しく言えば、皆韻開口の唇音字に属する17字³¹はすべて佳韻に載っており、そのうち‘俳’と‘鞣’の2文字だけに‘又愧韻’が付いている。それらの字を修正するとき、現実漢字音を受け入れようとしたとすれば、‘又韻’という仕掛けをして現実漢字音の傾向を表そうとしたはずであるが、『東国正韻』の編者らはその試みすらしなかった。つまり、唇音字の場合、合口と同様に現実漢字音を受け入れるより中国伝統の音韻学理論に基づいて修正したのである。

合口や唇音字の修正状況と2.1で述べた『東国正韻』の修正基準を合わせて考えてみると、『東国正韻』では、韻尾が写されていない中声表記、主要母音が完全に異なっている中声表記、開合が間違っている(唇音除外)中声表記だけでなく、合口や唇音字の中声表記も修正対象になったとしなければならない。

3. 終声「ㄱ」の韻類

「庚耕³²」韻及び「東冬³³」韻はすべて陽声韻尾([-ŋ])あるいは入声韻尾([-k])を持っており、現実漢字音においてはその韻尾が終声「ㅇ」「ㄱ」に写されている。「庚耕」はすべて梗攝2等韻に当たり、『東国正韻』の「拈([ʌiŋ]および[ʌik])」韻や「京([iəŋ]および[iək])」韻に置かれている。「東冬」韻は通攝1等韻であり『東国正韻』の「公([oŋ]および[ok])」韻に置かれている。以下ではまず「拈」韻や「京」韻について説明し、次に「公」韻について述べる。ここに本文が入ります。

3.1 「拈」韻「京」韻

文献資料に見られる庚韻と耕韻の合流状況は少し複雑である。馬徳強(2008: 71)によると玄応音では2つの韻の開口が合流していた反面、合口は区別できたが、同じ時期の顔師古音(『漢書注』や『匡謬正俗』)では開合を問わずすべて合流しているという。だが、何超音の時期には開口合口がすべて区別されており、慧琳音の時期になって完全に合流したという。この両韻の『洪武正韻訳訓』漢字音は開口の場合すべての中声が「-」([i])に現れるが、俗音の中声は「-」に又音の中声は「」([i])に現れる。つまり正音は「-」であったものの実際には「-」あるいは「」に発音した場合が多かったということである。そのうち俗音は梗攝1等と合流

³¹ 「拜扒滙濃排俳(滂母)痛鞠囊排(並母)補理狸蠶蠶鞣」

³² 庚韻の入声韻である陌韻を含めて庚韻と呼び、耕韻の入声である韻麦韻を含めて耕韻と呼ぶ。

³³ 東韻の入声韻である屋韻を含めて東韻と呼び、冬韻の入声韻である沃韻を含めて冬韻と呼ぶ。

した音を反映しており、又音は3、4等に合流した音を現しているものと考えられる。それから合口の中声はすべて「ㄨ」([ui])になっており、俗音や又音がない。

庚韻開口の中古音は[an] (入声は[ak])に、耕韻開口は[en] (入声は[ek])に推定する。つまり庚韻は蟹摂2等である佳韻夬韻と同じ主要母音を持っており、耕韻は皆韻と同じ主要母音を持っている。また庚韻と耕韻は重韻の対になっている。したがって庚、耕韻の現実漢字音の中終声はそれぞれ「ㄛ」([an])と「ㄜ」([en])のように現れるのが自然だろうと推測できる。しかし、それら両韻の現実漢字音を見ると、重韻の違いが全く現れず「ㄨ」([ui])「ㄨ」([ia])「ㄨ」([a])「ㄨ」([i])4つの中声に現れるということが明らかになる。出現頻度は「ㄨ」が最も高く、次に牙喉音字一部の中声が「ㄨ」に現れる。「ㄨ」は庚韻にだけ見られており「ㄨ」は耕韻唇音字の一部に現れる。そのうち「ㄨ」は類推である可能性が高い³⁴。また、重韻の違いが現れないのは合口の現実漢字音も同様である。合口の場合、全体9字のなかで類推によるものと考えられる咽、咽2字を除けばすべての中声が「ㄨ」に現れる。以上のような現実漢字音表記を見ると、次の3つが疑問になる。まず、韻尾[-i]を持たない梗摂2等の中声がなぜ「ㄨ」のように現れているのであろうか。次に重韻の違いがまったく見られない理由はなんであらうか。最後に一部の中声が「ㄨ」になっているが、これはなにを写しているのであろうか。

梗摂2等開口が韻尾[-i]を持たない韻にもかかわらずその韻母が「ㄨ」に写されている理由について平山久雄(1998)は口蓋化した入声韻尾に影響された結果と説明した³⁵。確かにほとんどの梗摂2等開口の中声が「ㄨ」に現れるのは以上のような中国音の変化とかかわっていると感ぜられる。だが、梗摂と同じく入声韻尾[-ŋ]を持つ宕摂1等との関係を考えに入れれば、梗摂2等開口の現実漢字音の中声が二重母音になった理由がさらに明らかになると思う。

宕摂1等開口の推定音は[an]であり、庚韻耕韻開口の推定音はそれぞれ[an]と[en]である。したがって蟹摂1、2等重韻の現実漢字音に照らしてみれば、宕摂1等と庚韻の中声が「ㄨ」に耕韻の中声が「ㄨ」に現れるのが自然だろうと思われる。しかし、庚韻は耕韻と同じく梗摂に属し、宕摂の1等とは摂を異にする。つまり庚韻と耕韻に重韻の差があったとはいえ、その音の差異は他摂との差に比べれば少なかったはずであらう。そういう理由で宕摂1等の中声は「ㄨ」に、ほとんどの梗摂2等の中声は「ㄨ」になったとしてみよう。ところが現実漢字音において「ㄜ」という音節は存在しなかった。そういう場合、韻母の主要母音を他の母音に受け入れて漢字音を写すか、渡り音を挟む方法があったらうと思われるが、口蓋化した陽声(入声)韻尾に影響されて渡り音[i]が挟まれるようになった結果、梗摂2等の中声が「ㄨ」になったのではないだろうか。つまり現実漢字音に梗摂2等重韻の違いが現れない理由は宕摂1等との弁別性を保つためであり、庚韻一部の中声が「ㄨ」に写されたのはその音が宕摂1等の音とも類似していたため混乱した痕跡であらうと思われる。

³⁴ 伊藤智ゆき(2007: 218)によると「棚綱」の現実漢字音[pig]は並母登韻「朋」の現実漢字音[pig]の類推という。

³⁵ 「梗摂2等の韻尾は既に主母音/a/の舌位置が同化できる範囲を越えてさらに前進しており、口蓋性はその固有の特徴となって/-ŋ/-c/に変化していた。/-ŋ/-c/の舌位置は[i]に似た渡り音を伴いやすかった。」伊藤智ゆき(2007: 215) 再引用

その一方、梗摂2等字の中声がまるで3等介音を持っているように中声「ㄷ」に現れる現象に関連しては口蓋化した声母に影響された中国音を写しているという説³⁶や、上古音の2等介音[l]から変化してきた[e]を反映しているという説³⁷がある。この両説は梗摂2等の現実漢字音がどの時期の中国音を受け入れたのかという問題において見解を異にしている。つまり河野六郎(1968)は中古以降の音に影響された結果と述べた反面、金泰慶(2013)は上古音時期に2等韻が持っていた介音[e]が反映された表記と説明しているのである。ところで、もし中声「ㄷ」に写されている介音が2等介音だとすれば、梗摂2等の一部の現実漢字音の中声が「ㄷ」に写されている理由は説明できるが、現実漢字音の基層音の時期が5~6世紀までさかのぼってしまう。そうすると上述した梗摂2等の中声に韻尾[-i]が挟まれた理由が説明できない³⁸。したがって現時点では河野六郎の説が最も妥当と考えられるが、現実漢字音に2等介音のなごりが残っているというふうに説明するのは、完全に矛盾した話とは言えないだろう。これに関しては現実漢字音の基層音の問題と共にさらなる研究が必要だろう。

梗摂2等韻の『東国正韻』漢字音を見ると、合口の場合すべてが摺韻合口に置かれているということがわかる。これは現実漢字音をそのまま受け入れた結果である³⁹。それに反して開口の場合、梗摂2等開口のほとんどは摺韻開口に置かれているが、牙喉音字の一部は京韻に配属している。つまり、庚韻の喉音字一部⁴⁰や耕韻見母字の中声が「ㄷ」になっているのである。梗摂2等開口の現実漢字音と『東国正韻』漢字音の中声を比較してみると次の<表5>のようになる。

<表5> 梗摂2等開口の現実漢字音と『東国正韻』漢字音の中声比較

韻母	声母	現実漢字音の中声	『東国正韻』漢字音の中声
庚韻	牙音	「ㄷ」 羹哽坑更(去声) 客額(6)	ㄷ
		「ㄷ」 梗庚鶻緹假格(6)	
		「ㄷ」 「ㄷ」 更(平声)梗(2) 「ㄷ」 骼(1)	
耕韻	牙音(見母除外)	「ㄷ」 鏗(1) 「ㄷ」 硜(1)	ㄷ

³⁶ 河野六郎(1968:146~147)は現代北京音の梗摂2等牙喉音字には二系統の音が合流していると述べた。そのうち tsing¹は kang の声母が口蓋化して ki_ān g の段階を経て変化した結果であるが、韓国の現実漢字音の 𪛗 が ki_ān g の段階を写しているとして述べた。また現実漢字音の中声が「ㄷ」に現れるのは kan g か ken g となった段階かいつれとも考えられると説明した。

³⁷ 金泰慶(2013)は 梗摂2等と効摂の一部の現実漢字音が[-i]介音を写している理由は漢字音が流入したとき2等韻に介音が存在したためだと説明しながら、その介音の音価はおそらく王力(1980)が推定した[e]である可能性が高いと述べた。さらに2等韻の介音は『切韻』の時期には完全になくなったため、現実漢字音の基層音の時期は『切韻』以前の5~6世紀までさかのぼれると述べた。

³⁸ 梗摂2等の陽声韻尾が口蓋化したのは中古音の時期以降の現象であるため

³⁹ 例外である𪛗や𪛘の現実漢字音は「ㄷ」([kuk])に現れる。

⁴⁰ 庚韻喉音字の場合、現実漢字音資料まで備わっている例がない。しかし『東国正韻』の反切を調べた結果「京」韻に置かれている𪛗や𪛘(陌韻影母)のような例が見つかった。

庚韻	舌音	「ㄨ」 坼宅(微母)宅(澄母)澤擇擇擲(7) 「ㄨ」 根鋸(2) 「ㄨ」 瞠拆(2)	ㄨ
耕韻	舌音	「ㄨ」 謫 ⁴¹ (1)	ㄨ
庚韻	唇音	「ㄨ」 百伯栢烹魄彭白帛舶盲猛孟陌陌驀(15) 「ㄨ」 「ㄨ」 拍 ⁴² 珀(2) 「ㄨ」 駢(1) 「ㄨ」 迫(1)	ㄨ 駢には又京韻
耕韻	唇音	「ㄨ」 迸薛檠擗辟聵(6) 「ㄨ」 虻薨萌氓麥(5) 「ㄨ」 縑綳棚(3)	ㄨ 薛擗辟聵には又京韻
庚韻	齒音	「ㄨ」 笮生筴牲銚鋌甥省(8) 「ㄨ」 「ㄨ」 鑄(1) 「ㄨ」 猩(1)	ㄨ
耕韻	齒音	「ㄨ」 爭箏責噴策冊柵索(8) 「ㄨ」 「ㄨ」 諍(1) 「ㄨ」 幘(1)	ㄨ
庚韻	喉音(曉母 除外)	「ㄨ」 行桁杏(3) 「ㄨ」 衡(1)	ㄨ
耕韻	喉音	「ㄨ」 鸚櫻鸞厄阨軛莖幸覈核(10) 「ㄨ」 罌翮(2)	ㄨ
耕韻	來母	「ㄨ」 冷(1)	ㄨ
庚韻	曉母	「ㄨ」 赫亨(2)	ㄨ
耕韻	見母	「ㄨ」 耕隔隔籛(4)	ㄨ

<表5>により『東国正韻』漢字音が現実漢字音を最大限受け入れようとしたということが明らかになる。そのなかでも、中声が「ㄨ」に現れる庚韻と耕韻の一部の現実漢字音を修正せずそのまま受け入れたのは注目すべき事実である。1等と2等を区別せず、3等と4等を区別しないというのが『東国正韻』全般にかけて現れる特徴の1つであるが、2等の庚韻と耕韻を3、4等と一緒に分韻したためである。しかし、梗攝2等韻は中古音の時期以降に1等韻と合流したり、同じ梗攝の3等韻である清韻と合流したりする様相を呈するが『集韻』の韻目表を見ると、庚韻の下に‘与耕清通’といった句が確認できる。それは庚韻が耕韻あるいは清韻と通韻するという意味で、当時の中国の現実音を説明していると考えられる。『東国正韻』を編纂する際参考にした書物の1つであった『集韻』のそういった説明は『東国正韻』の編者らが梗攝2等韻を分韻するとき頼れる根拠になったと思われる。つまり、庚韻と耕韻の牙喉音の一部を京韻に

⁴¹ 伊藤智ゆき(2007)の資料表では1つの例しかないが、権仁瀚(2009)によると、「丁摘適」の現実漢字音の中声が「ㄨ」になっており、それらの『東国正韻』漢字音の中声は「ㄨ」であるが、搯韻にも置かれている。

⁴² 伊藤智ゆき(2007:218)は「拍珀」が唐韻字である「粕箔」の類推かも知れないと述べたが『集韻』を調べた結果「拍」の場合、普伯切(梗攝2等陌韻)だけでなく伯各切(宕攝1等鐸韻)をも持っているということを確認した。また「拍」は『東国正韻』においても「搯」韻と「江」韻に共に現れる。

入れて置いたのは、現実漢字音を受け入れると同時に漢字音の体系に何の混乱も招かない結果であったと見られる。

声母別修正状況を見ると、庚韻の牙音や耕韻の牙音と唇音の場合、その現実漢字音に特別な傾向が見られず、いろいろな中声に現れるということがわかる。だが『東国正韻』ではそれらの韻をすべて摺韻に入れておいた。それはおそらく庚韻と耕韻が本来2等であるためだと見られる。問題になるのは耕韻舌音と唇音であるが、それらの現実漢字音の中声がすべて「ㄷ」に現れるにもかかわらず『東国正韻』ではそれらをすべて「ㄷ」に修正して摺韻に載せたのである。しかし、調べた結果、舌音字の「丁摘適」字には梗摂2等の反切(中茎切、陟革切)の外に、梗摂4等の反切(当経切、都歴切、他歴切)もあり、『東国正韻』においても摺韻だけでなく京韻にもそれらの字が載ってあるということが確認できた。つまり、耕韻の舌音字の場合、現実漢字音を反映していると思われる。一方、唇音字の場合も、5字のうち4字に‘又京韻’のしるしが付いており、‘擗’と‘辟’の場合、複数の反切‘博厄切⁴³’や‘房益切⁴⁴’を持ついるのが確認できた。こういった事実から唇音字も舌音字と同様に現実漢字音を反映していると言えるかもしれないが、2.2で述べた内容に合わせて考えてみると、これはやはり‘等’によって修正したと見るほうが妥当であろう。

3.2 「公」韻

東韻⁴⁵と冬韻はすべて通摂に属す1等韻であり、両韻は重韻関係である。両韻はともに開合を区別しない韻である。文献によると、両韻の合流時期が声調によって異なっているということが明らかになる⁴⁶。平上去声の場合、玄応音の時期まで区別されていたが、何超音の時期に合流したとする。一方入声の場合、玄応音では合流した反面、同時期の顔師古音では区別された。だが、何超音の時期にはすべて合流したという。通摂1等の『洪武正韻訳訓』漢字音を見ると、重韻の違いは現れず、すべての中声が例外なく「ㄷ」になっている。

東韻の中古音は[ɔuŋ]に冬韻の中古音は[on]に推定する。両韻の主要母音は円唇母音に当たる。15世紀韓国語の母音体系には2つの円唇母音が存在したが「ㄷ」([u])と「ㄹ」([o])がそれである。したがって通摂1等の主要母音は「ㄷ」あるいは「ㄹ」に現れるはずであろう。通摂の現実漢字音を見ると、すべての中声が「ㄹ」に現れる。つまり重韻の違いが全く現れていないのである。その理由はおそらく通摂3等の牙喉音と関係があると思われる。つまり、通摂3等は通摂1等と同じ主要母音で、介音[i-]を持っている。一方、韓国語母音体系において「ㄷ」は「ㄹ」より高い母音に当たる。したがって通摂3等は介音[i-]に影響されて「ㄷ」に写され、介音を持たない東韻と冬韻はそれより低い「ㄹ」に写されたと思われる。つまりこれは韓国語の母音体系が中国語のそれより単純であったためだろうとも言える。限られている中

⁴³ 2等韻

⁴⁴ 3等韻

⁴⁵ 東韻には1等と3等がある。以下では東韻を東韻に略称する。

⁴⁶ 馬徳強(2008: 71)参照

声をもって多様な中国韻母を写すためには似ている音を1つの中声で表記するしかなかっただろう。

咸摂1等の『東国正韻』漢字音の中声を見ると、例外なく「ㄣ」になっている。それは現実漢字音を受け入れた結果だろう。

4. 終声「m」「n」の韻類

咸摂には重韻関係にある韻母が2対ある。1等の「覃談⁴⁷」韻と2等の「覃銜⁴⁸」韻がそれである。4つの韻母はすべて[-m]([-p])韻尾を持っており、『東国正韻』においては「甘([am]および[ap])」韻に置かれている。「刪山⁴⁹」韻は山摂に属している2等であり、韻尾[-n]([-t])を持っている。『東国正韻』においてはすべて「干([an]および[al])」韻に置かれている。咸摂には開口韻しか存在しないため、以下では咸摂1等や2等開口について述べた後で、山摂について探ることにする。

4.1 「甘」韻

文献資料から見ると、咸摂重韻の中国音は等によって合流時期が異なっている。まず1等である覃韻や談韻は舒声入声を問わず、玄応音では区別されたが、同じ時期の顔師古音では合流しているという。しかし、何超音の時期には合流したとする。次に2等である咸韻や銜韻は玄応音の時期には合流しているが、意外にも何超音の時期には区別されており、慧琳音の時期になって完全に合流したという⁵⁰。咸摂1、2等の『洪武正韻訳訓』漢字音を見ると、1等舒声の場合ほとんどすべての中終声が「ㄎ」([am])になっているが、牙音一部と舌音一部の俗音が「ㄎ」([an])に現れる。また、入声の場合、ほぼ「ㄎ」([ap])に現れるが、牙喉音一部の俗音が「ㄎ」([əʔ])に現れる。2等の場合、中終声が「ㄎ」(入声「ㄎ」)に現れるのが原則であるらしいが、牙喉音の場合舒声入声を問わず「ㄎ」([ian])(入声「ㄎ」([iap]))に現れる。『洪武正韻訳訓』が編纂された時期に中古音の入声韻尾[-p]([-t] [-k])はすでになくなっており、それと対になる陽声韻尾[-m] [-n] [-ŋ]のうち、[-m]と[-n]が合流した。『洪武正韻訳訓』漢字音の俗音はそういった中国音の変化を部分的に反映していると考えられる。

咸摂1等の現実漢字音を見ると、ほとんどすべての中声が「ㄎ」に現れる⁵¹。覃韻や談韻の中古音はそれぞれ[am]と[am]に推定するが、両韻の主要母音を共に「ㄎ」に写したのである。

⁴⁷ 覃韻の入声である合韻を合わせて覃韻に、談韻の入声である盍韻を合わせて談韻に略す。

⁴⁸ 咸韻の入声である洽韻を合わせて咸韻に、銜韻の入声である狎韻を合わせて銜韻に略す。

⁴⁹ 刪韻の入声である鎋韻を合わせて刪韻に、山韻の入声である黠韻を合わせて山韻に略す。

⁵⁰ 馬徳強(2008: 71)参照

⁵¹ まず、覃韻の例外を見ると「蠶」の中声が「ㄎ」に現れ「糝」の中声が「ㄎ」の他に「ㄎ」と「ㄎ」に現れる。また、韻尾が写されていないか間違っている場合もあるが「南」の場合、現実漢字音が「ㄎ」に現れ「鋤」は陽声韻尾が入声韻尾のように写されている。伊藤智ゆき(2007: 170)では「鋤」が覃韻の平声字と述べ、その現実漢字音は「匣」の類推と説明した。しかし「鋤」の反切を調べた結果覃韻の入声字ということが確認できた。さらに『東国正韻』でも「鋤」は「甘」韻の入声韻である「閏」韻に置かれている。次に、談韻の例外には「飲」(「ㄎ」)の1例しかない。

中声が「・」になっている例外が2つ見られるが、残っている例があまりにも少なくて覃韻と談韻の重韻の差異を表しているとは言いにくい、重韻のなごりとは言えるかもしれない。咸摂1等の現実漢字音に重韻の差異がほとんど見られない理由はおそらくそれら韻尾に影響されたためだろう。

咸摂1等より合流時期が遅かったと見える咸摂2等、即ち咸韻や銜韻の推定音は[em]と[am]である。2等は1等より例外が比較的多く見られるが、銜韻の場合例外がない。咸韻字のなかで、中声が「ㄷ」に現れるのが5つ(讎袂跽狹)あり、「一」に現れるのが1つ(洽)ある。それら例外はすべて咸韻牙喉音字である。そのうち「ㄷ」になっている例外について伊藤智ゆき(2007:171)は複数の音を持っていた可能性(狹狹)、類推によるもの(讎袂)、原因不明(跽)に分けて説明したが、牙喉音の口蓋化を反映する可能性もないわけではないとした⁵²。しかし、金泰慶(2013)は咸韻の例外が2等の介音を表している可能性があるとして述べた。それは現実漢字音の基層音問題に繋がるため、はっきり言いにくい、梗摂2等と同様に上古音のなごりと見なすことができるだろう。

咸摂1、2等の『東国正韻』漢字音を見ると、すべての中声が「ト」になっている。それは現実漢字音を受容した結果であると考えられる。咸韻の現実漢字音に例外があったが、ほとんどの咸韻牙喉音の中声が「ト」に現れるため、例外をすべて修正して甘韻に入れておいたのである。

4.2 「山」韻

山摂2等重韻の合流時期は声調によって若干異なっている。馬徳強(2008:71)によると、入声の場合開合を問わず玄応音の時期からすべて合流しているという。しかし、舒声の場合、玄応音の時期には上声の開口だけが合流しており、平声去声の開合及び上声の合口は区別されているという。だが、同じ時期の顔師古音ではすべて合流しており、何超音の時期からはすべて合流したという。つまり山摂2等の重韻は比較的早い時期に合流したと考えられる。刪韻や山韻の『洪武正韻訳訓』漢字音を見ると、まず開口牙喉音の場合、中終声が「ㄷ」([ian])(入声「ㄷ」([iat]))になっており、他の声母は「ㄷ」([an])(入声「ㄷ」(at))に現れる。一方合口の場合、ほとんどすべてが「ㄷ」([wan])(「ㄷ」([wat]))に現れるが、齒音の一部の中終声は「ㄷ」(入声なし)に現れ、俗音が「ㄷ」になっている。

山摂2等である刪韻と山韻開口の中古音はそれぞれ[an]と[en]に推定されている。山摂2等開口の現実漢字音を見ると、3文字の例外⁵³を除けばすべての中声が「ト」に現れる。ところで、山韻上声字のうち「限」字の中声が「・」になっているが、例が1つしか残っていないため、それが重韻の違いを反映するとは言いにくい。合口の場合、中古音の推定音は合口介音が付い

⁵² 中声が「一」に現れる「洽」については「侵韻と類似する何らかの弱化した主母音を写しているのだろうか」と述べた。伊藤智ゆき(2007:171)

⁵³ 伊藤智ゆき(2007:180)は山摂2等開口の例外には類推によるもの(限と菅)や反切を誤読したもの(盼)があると述べた。しかし「菅」の場合、まだ反切は見当たらなかったが『東国正韻』で「菅」が山韻の開口と合口の両方に載っていることから考えれば、2つの音を持っていた可能性がある。

た[uan]と[uen]になる。合口の現実漢字音にも幾つかの例外⁵⁴を除けばほとんどすべての中声
が「斗」になっている。つまり山撰2等の現実漢字音にも重韻の違いが全く現れないと言える。
それはおそらく韻尾に影響されたためでもあり、重韻の合流時期が最も早かったためでもある
と思われる。

『東国正韻』漢字音でも山撰2等重韻の差異は全く現れない。例外を修正しただけで、其
の他は現実漢字音の中声をそのまま受容している。

5. 結論

本研究では重韻に当たる「哈(灰)泰」「皆佳夬」「庚耕」「東冬」「刪山」「覃談」「咸銜」韻の
現実漢字音や『東国正韻』漢字音の中声表記について検討した。その結果、ほとんどの場合『東
国正韻』漢字音が現実漢字音をそのまま受け入れているということが明らかになった。現実漢
字音と『東国正韻』漢字音の重韻字表記の特徴をまとめてみると次のようである。

現実漢字音には蟹撰1、2等を除けば、重韻の違いがほぼ見られなかったが、その理由は3
つに分けて考えることができる。まず、山撰2等や咸撰1、2等の場合、韻尾に影響されたため、
重韻の差が現れないと思われる。次に、通撰1等の場合、韻尾の影響と同時に韓国語の母音体
系の単純性が原因と考えられる。最後に、梗撰2等に重韻の違いが現れないのは音節制約と関係
があると思われる。

一方『東国正韻』漢字音について検討した結果、次の2つが明らかになった。まず『東国正
韻』では漢字音体系の全体に影響を与えない限り現実漢字音をほとんどそのまま受け入れたが、
現実漢字音に特別な傾向が見られない場合、等によって分韻したということがわかった。また
複数の音を持っている場合「又韻」というしるしを利用して表したが、そのしるしが複数の中
国音を表しているのか、それとも複数の現実漢字音を表しているのかについてはすべての『東
国正韻』漢字音の反切を調べてみなければはっきり言えないと思う。次に、韻尾が写されてい
ない中声表記、主要母音が完全に異なっている中声表記、開合が間違っている中声表記は必ず
修正しているということが再度確認できた。ただし、唇音字の場合、現実漢字音を受け入れず
等によって分韻したと思われる。これを他の『東国正韻』の修正基準と合わせて考えてみると、
韓国語の中声に当たる中国語の韻母の要素のうち、3等介音と主要母音⁵⁵を除いたすべての要素、
すなわち、合口介音、陰声韻尾が中声表記に反映されていない場合には、現実漢字音を受け入
れず、‘等’や‘韻’によって修正したと考えられる。言い換えれば、基本11中声に何らかの
資質が付いた場合、その加わった資質が修正対象になり、その修正基準は中国伝統の音韻学理
論に基いていたと言えるかも知れない。それを明らかにするためにはすべての『東国正韻』漢
字音の中声に関する研究をさらに深める必要がある。

⁵⁴ 山撰2等合口の例外には、合口性が脱落した場合(齒音字)、類推によるもの(亂や鸞)、韻尾が写されていない場合(刷)がある。伊藤智ゆき(2007: 182)

⁵⁵ 中声に異なる主要母音が写されている場合は別途にする。

参考文献

<辞書類>

- 建国大学校出版部 (1988) 『東国正韻』 ソウル: 建国大学校出版部.
高麗大学校出版部 (1973) 『洪武正韻訳訓』 ソウル: 高麗大学校出版部.
高麗大学校出版部 (1973) 『洪武正韻訳訓』 ソウル: 高麗大学校出版部.
権仁瀚 (2005) 『中世韓国漢字音訓集成』 ソウル: J&C.
権仁瀚 (2009) 『中世韓国漢字音の分析的研究』 ソウル: 博文社.
郭錫良 (1986) 『漢字古音手冊』 北京: 北京大学出版社.
芸文印書館 (1975) 『等韻五種』 台北: 芸文印書館.
周祖謨 (2004) 『廣韻校本(第三版)』 北京: 中華書局.
中華書局 (1980) 『集韻(第三版)』 台北: 台湾中華書局印刷廠.

<単行本類>

- 沈小喜 (2013) 『漢字正音觀の通時的研究』 ソウル: 梨花女子大学校出版部.
俞昌均 (1966) 『東国正韻研究』 ソウル: 螢雪出版社.
李基文 (1990) 『国語音韻史研究』 (国語学叢書) ソウル: 塔出版社.
李基文 (1998、2003) 『国語史概説』 ソウル: 泰学社.
崔玲愛 (2000) 『中国語音韻学』 ソウル: トンナム.
伊藤智ゆき (2007) 『朝鮮漢字音研究』 東京: 汲古書院.
河野六郎 (1968) 『朝鮮漢字音の研究』 天理時報社.
河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集』 (2) 東京: 平凡社.
平山久雄 (1967) 「中古漢語の音韻」 牛島徳次・香坂順一・藤堂明保 (編) 『言語』 -中國文化叢書 1: 112-166. 東京: 大修館書店.

<論文類>

- 金泰慶 (2013) 「效梗攝 二等字の韓国漢字音と二等韻の介音」 『中国語文学論集』 82: 45-62.
沈小喜 (1996) 「皇極經世声音唱和図研究-正音觀と音韻体系を中心に-」 博士論文, 延世大学大学院.
林茶英 (2010) 「『東国正韻』漢字音と現実漢字音の比較研究-止攝と蟹攝を中心に-」 修士論文, 延世大学大学院.
趙雲星 (2011) 「『東国正韻』漢字音の声母と韻母の体系研究」 博士論文, 延世大学大学院.
馬徳強 (2008) 「重韻研究」 博士論文, 復旦大学.

A Study on the Transcription of the Sino-Korean of *Donggukjeongun*: Mainly on “Double Rhymes”

Lim Dayong

limdy78@gmail.com

Keywords: Sino-Korean, *Donggukjeongun*, medial sound, rhyme, double rhymes, grade(等), she(攝),
kaihe(開合)

Abstract

This study aims to clarify the correction rules of *Donggukjeongun* and prove the medial of Sino-Korean of *Donggukjeongun*, the revised version of Sino-Korean, basically followed those of the traditional Sino-Korean at the time. As for the first Grade of Tong-She, the first and second Grade of Xian-She, the second Grade of Shan-She, there was not much difference between the medial sounds of *Donggukjeongun* and the corresponding traditional Sino-Korean medial sounds for these rhymes. However, in the case of the first and second Grade of Xie-She and the second Grade of Geng-She, the medial sounds of *Donggukjeongun* for these rhymes apparently did not follow the traditional Sino-Korean system. In order to explain this difference, this study closely compared the two Sino-Korean systems and it was revealed that the *Donggukjeongun* medial sounds of Kaikou for these rhymes basically followed the patterns found in the traditional Sino-Korean system, but if any specific pattern was found, such characters were arranged according to the Grade. Also, it was revealed that the *Donggukjeongun* medial sounds of Hekou and characters with a labial initial, on the other hand, did not follow traditional Sino-Korean and were arranged according to the Grade. This means that a kind of special treatment for the characters with a [+rounded] feature was required in the correction process.

(1ム タ* ヲ)